第三講 〈論説〉 科学論・精神医学論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もし、人体研究を医学というならば、それは科学である。すなわち、人体にかんする一種の生物学である。しかし、それは「疾患に関係しているところを特に詳しく調べる人体生物学である」という付記を加えても、医学であろうか。それは「医学的生物学」medical biology である。

では、何が足りないのであろうか。犯罪学者でもあるエランベルジェは、犯罪学と医学が科学でない理由として、疾患の研究、犯罪の研究からは「疾患は治療するべきであり、犯罪は防止するべきであるということが理論的に出てこない」ことを強調している。すなわち、彼によれば、犯罪学と医学は「科学プラス倫理」であって、これを総合科学と呼ぼうと提唱している――「科学」という言葉を使っているではないかといわれそうだが、欧米語のサイエンスはラテン語の scientia に発して「知」ということである。「総合知」と訳したほうがよかったであろう。ちなみに「科学」は日本最初の「哲学者」西周（にしあまね）の造語で「科」は「分科」ではなく「法則」の意味である。「法則の定立を目指す学」ということだ。

(1)この指摘は確かに一つのポイントである。では、倫理と科学といずれが優先するであろうか。科学的であっても反倫理的であれば医学ではない。逆に、治療を目的とするものであれば、現に用いられているように経験論的医学たとえば中医学であってもよい。難治褥瘡（じょくそう）や歯周病の治療にはしばしば健康食品プロポリスが有効である。こういう裾野（すその）を含めて、医学とはまず倫理的なものである。

しかし、それでは不十分であると私は考える。少なくとも、もう一点で、医学は科学と相違する。それは、囲碁（いご）や将棋が数学化できるかどうかという問題と本質的に同じである。囲碁や将棋は数学化できない。それは、科学とちがって徹底的に対象化することのできない「相手」があるからである。「対象」でなく「相手」である。わかりやすいために、殺伐な話だが戦争術を考えてみるとよい。実験的法則科学はいつも成立しなければならないが、「必ず勝てる」軍事学はない。もしできれば、人間に理性がある限り、戦争は起こらない。それでも起これば、それは心理学か犯罪学という「総合知」の対象である。経済学でもよい。

インフレやデフレなどの経済学的不都合を絶対に克服する学ではなく、その確実な予測の学でさえない。これらが向かい合うものは「相手」である。科学は向かい合うものを徹底的に対象化する。そしてほとんどつねに成り立つ「再現性のある」定式の集合である。対象化と再現性は表裏一体である。すなわち、「相手」が予想外の動きをしては困るのである。ところが、囲碁や将棋や戦争術は相手の予想外に出ようとする主体間の術である。なるほど、経済学は、常に最大利益を得ようとして行動する「経済人（ホモ・エコノミクス）」というものを仮定しているが、これは人工的な対象化であって、経済学が経済の実態の予測を困難にしている一因である。それは、経済学の対象すなわち経済行動を行う人間の持つ、利益追求の欲望以外の心理学的要素の大きさを重々自覚しながら、これを数理化できないために排除しているからである。つまり、(2)科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた。現在、むき出しの「市場原理」が復権をとげている。「市場原理」ならばローマ時代、いや太古からあった。

(3)医学も何かを相手に将棋を指している。その相手は何であろうか。ある人は「病い」といい、ある人はそれは抽象概念の実体化であって相手は「病める人間」であるという。「生物学的・心理学的・社会学的人間」だともいう。「人間の集団」だと疫学はいうであろう。「実存的なもの」も排除できない。実に、医学は「相手は何か」と問いつめられると困るものではないだろうか。医学には他の「学問・技術」にはない、混沌（こんとん）・未分化的なものがある。いずれにせよ相手は複雑な系であり、たえず予想を裏切るように動いている。

その相手が将棋と違うのは、治療者と対等で同質な［（4）］ではない点である。しかし、一方だけを［（4）］として、相手を徹底的に対象化することができない点は同じである。相手を固定すなわち対象化しようとしては裏切られるような力動的関係にあるというべきか。それは戦争術に似ている。この力動的関係の混沌・未分化性は、その「未発達性」のためではないと私は考える。すなわち、人間が人間を相手としているからである。医学においては相手を生かすために、戦争術においては相手の立場を失わせるために――。メスをふるう外科医は自身も創傷や腫瘍（しゅよう）を持つ可能性を抱えている。痛みうる人間が医学、精神医学をやり、犯罪を犯しうる人間が犯罪学をやる。こういう対象化しえないものを相手とする学があることは確かである。それは近似的な、おおむねこうすればおおむね成功するであろうという「定石」から始まるが、意外にも「捨て石」が死活問題を解決したりして、有限時間内には完全に言語あるいは数式化できないものである。つまり、時には何が正しいかを言えなくとも、ある時

間の範囲に何ごとかをしなければならない場合がある。すなわち、直観や熟練（スキル）を必要とする。最後には言語化が不可能に近いものをも含む。医学はなぜ独学で学べないかをよく考えてみよう。

科学は、この不確定部分を最小にしようとする。それが医学の科学的部分である。最小化しようとするのは、しかし、科学の専売ではない。経験、熟練、直観も、不確定性を最小にしようとする。飛行機の操縦術や航海術と同じである。

では、ありとあらゆる場合を予想して方策を立てれば、医学はついに科学となるであろうか。すでにチェスはコンピュータがしばしば名人を負かしているではないか。この場合、チェスをするコンピュータは科学によって作られたものだが、科学を離れて、「相手」のある領域に入り込んでいるのである。実際、負けたり勝ったりするではないか。

いや、コンピュータをもっと進歩させれば、チェスで必ず勝つであろう、いや今は勝てない碁や将棋でも必ず勝てるであろうという議論があるかもしれない。これは科学の勝利である――と。それは科学の勝利ではあるが、科学になったのではない。そういうコンピュータができて、それが普及すれば、そのゲームは魅力を失い、やがて消滅するであろう。つまり、問題そのものがなくなってしまう。その前にコンピュータ同士を闘わせるかもしれないが、これはコンピュータ設計者同士の闘いであり、ローマ人が猛獣あるいは剣士を闘わせて見物していたのと少し違う。

将棋や碁と違って、医学でも戦争術でも、完全なデータを得ることはできない。一般に、データを得るためには対象を多少なりとも破壊しなければならないからである。また、データは必ず時遅れである。不完全なデータから［（５）］して事態を先取りしなければならない。そして、医学という実践は、相当に安定した部分をも含むけれども、それでも特異体質などに裏切られることになる。状況に応じて変化するスキルをも含む。目標、いや目標を越えた大局観に関するスキルも必要である。先端的な部分では、職人的なスキルと戦略家のような決断の比重が大きくなる。たとえば、微細な血管が入り組んでいる部分の手術である。ここでは技術（テクニック）と戦術（タクティックス）と戦略（ストラテジー）のヒエラルキーが確実に術者の中で動いていることが必要である。

このようなタイプの「相手」と向き合うものを科学や人間以外のものを「相手」とする術と区別して何と呼ぶのがよいであろうか。私には成案がないが、仮に「実践知」としておこう。それは生の現実と相渉（わた）るものである。

その有力な方法であるスキルについて一言しておこう。スキルは、言語によって伝達できない部分を含む。理論的には言語化できるかもしれないが、具体的に異星人に鉛筆の削り方を教える場合を考えてみればよい。鉛筆をみたことのない者に対する「鉛

筆の削り方マニュアル」を作成すれば何ページになるであろうか。どの筋肉の次にどの筋肉をどれだけどの方向に動かすとかを書いてゆくことを考えてみよう。しかし、眼の前で削ってみせればあっという間に伝達できる。これを行動による伝達としよう。最近の医学教育には、鉛筆を削るマニュアルを、鉛筆を削ってみせることよりも何か正しいこと、新しいことのように考えるきらいがある。その傾向は現場を知らずに育った医学教育者に特にみられる。スキルにはそういう（6）的にしか伝達しえないものがある。

（中井久夫『徴候・記憶・外傷』による）

（注）エランベルジェ――二十世紀の精神科医、犯罪学者、歴史学者。
中医学――漢方や鍼灸（しんきゅう）などの中国の伝統医学。

問1　傍線（1）「この指摘」とはどのような指摘か。もっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

A　犯罪学や医学の研究は科学とは異なり、必ずしも犯罪の防止や病の治療を目的とするとは限らないという、エランベルジェの指摘。

B　エランベルジェが犯罪学や医学に与えた呼称である「総合科学」は、むしろ「総合知」と訳した方が適切であっただろうという指摘。

C　エランベルジェがそうであるように、犯罪学者や医者は、単に優れた科学者であるだけでなく、高いモラルを兼ね備えていなければならないという指摘。

D　科学とはもともと「法則の定立を目指す学」であるから、法則に還元できない複雑な犯罪や疾患の研究は科学とは異なるという指摘。

E　犯罪学や医学は、科学的研究の側面を持ちながらも、社会道徳や人道に適（かな）った目的のためになされなければならない点で、科学とは異なるという指摘。

問２　傍線（２）「科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

Ａ　経済学は、経済活動を行う人間の複雑な心理学的要素まで科学的に解明しようと努力したが、現実には到底数理化することはできないので、かえって不完全な科学にとどまる結果となった。

Ｂ　経済学は、予想外の行動をとる人間の経済行動を数理化することばかりにとらわれて、その一方で、現実に起こっているインフレやデフレなどの経済的不都合に対処することを怠るようになった。

Ｃ　経済学は、インフレやデフレなどの経済的不都合を科学的に解明しようと試みたが、その際、現実には、利益追求の欲望以外の心理学的要素がいかに経済行動に影響しているかを過小評価した。

Ｄ　経済学は、数理化できないものはあえて対象としなかったために、利益追求の欲求だけに従って行動する「経済人」という現実には存在しないような架空の対象を相手とする事態となった。

Ｅ　経済学は、人間は利益追求の欲求に従って行動するという理論に基づいているので、その結果、太古から存在するとはいえ現実には機能しない「市場原理」を復活させた。

問３　傍線（３）「医学も何かを相手に将棋を指している」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

Ａ　医学においても医者や医学研究者は、「病い」という抽象的な相手を打ち負かそうとしている。

Ｂ　医学においても医者や医学研究者は、同じ人間として患者と対等に向き合っている。

Ｃ　医学においても医者や医学研究者は、科学的に対象化しきれないものを相手にしている。

Ｄ　医学においても医者や医学研究者は、予想を裏切るようなものを排除しようとしている。

Ｅ　医学においても医者や医学研究者は、現在予測できないものも予測しようと試みている。

問4　空欄（4）（5）（6）に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ次の中から選び、符号で答えよ。

（4）A　主体　B　客体　C　実体　D　人間　E　対象

（5）A　飛躍　B　熟考　C　推論　D　即断　E　復元

（6）A　感覚　B　実践　C　直観　D　身体　E　視覚

問5　次のア～エのうち、筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えよ。

ア　その研究がどんなに優れたものであり科学の発展に貢献するものであっても、結果として治療に役立たなければ医学とはいえない。

イ　医学は人間を相手にしているがゆえに、患者の特異体質のような予想外のケースが生じることは避けられない。しかし、医学はこうした特殊なケースに関してもできるだけデータを集積し、可能な限り法則化を試みている。

ウ　囲碁や将棋は、もし相手の作戦や勝敗が常に予想できるのであれば成立しない。つまり、科学になりえないことこそがゲームの成立条件だといえる。

エ　医療の現場ではしばしば、限られた時間内で治療方法を決断しなければならない。その際には、一般的に有効とされている治療方法より、熟練や直観によって得られた治療方法の方がかえって功を奏することがある。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　中井久夫＝なかい　ひさお（一九三四〜）奈良県生まれ。京都大学医学部卒。著名な精神科医で本書は多くの大学入試で出題されている

●西周＝にし　あまね（一八二九〜一八九七）石見（いわみ）（現在の島根県）生まれ。福沢諭吉（ふくざわゆきち）や森有礼（もりありのり）らと結成した明六社（めいろくしゃ）のメンバー。多くの翻訳語・学術語の創出に貢献した

語句

疾患＝しっかん→心身のある部分の不具合。病気

提唱＝ていしょう→先だってある意見のよさを表明すること

褥瘡＝じょくそう→床ずれのこと

対象化＝たいしょうか→研究や分析の向かう相手をモノとし固定化すること

殺伐＝さつばつ→穏やかではないこと

表裏一体＝ひょうりいったい→表面上は異なるように見えるものが根底で一致していること

主体＝しゅたい→思考や行動を起こす者。人間

復権＝ふっけん→かつての勢力や高い地位を取り戻すこと

概念＝がいねん→思考や思想、またそれを表現する抽象的な言葉のこと

実体化＝じったいか→具体的形のないものに形を与えること

疫学＝えきがく↓集団の統計的調査分析をする医学の一分野
実存＝じつぞん↓「人間」と共通にくくることのできない、個々に特別な人のあり方。現実存在
混沌＝こんとん↓整理された秩序（コスモス）以前のどろどろの状態。カオス
未分化＝みぶんか↓分析分割以前ということ
系＝けい↓様々なものが統一的にまとまっているシステム。体系
力動的＝りきどうてき↓固定化できないダイナミックな様子
創傷＝そうしょう↓身体の傷
腫瘍＝しゅよう↓身体にできる異常な細胞の集まり。癌（がん）など
定石＝じょうせき↓基本に忠実で安定して有効な方法
捨て石＝すていし↓作戦上、無駄に打ったもの。犠牲。「捨て駒（ごま）」とも表現する
直観＝ちょっかん↓一度に全体を把握すること。インテュイション
　同音異義語…直感↓ひらめき・勘・インスピレーション
専売＝せんばい↓独占的に取り扱うこと
大局観＝たいきょくかん↓全体を見通すものの見方
ヒエラルキー↓ピラミッド型の階層構造、序列の構造。位階
戦略＝せんりゃく↓長期的で大きな方向性を考えること
戦術＝せんじゅつ↓局所的部分的な対処法を考えること
成案＝せいあん↓完結完成した意見や提案　対義語…試案・草案

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）斬新な学説を提ショウする　①証　②賞　③章　④唱　⑤照

（イ）サッ伐とした話をする　①刹　②殺　③撮　④擦　⑤薩

（ウ）困難や不都合を克フクする　①副　②覆　③服　④福　⑤複

（エ）航空機を自在に操ジュウする　①従　②銃　③柔　④縦　⑤揉

（オ）タイ局観をもって対処する　①大　②対　③体　④耐　⑤態

（カ）人間を対ショウ化できない　①照　②称　③賞　④象　⑤症

（キ）実験をサイ現して証明する　①再　②際　③採　④裁　⑤済

（ク）構造を近ジ的に把握する　①字　②次　③治　④自　⑤似

（ケ）全体像を直カン的に捉える　①感　②勘　③観　④幹　⑤敢

（コ）特イ体質にも対応する　①偉　②威　③意　④医　⑤異

第三講　模範解答

問1　E

問2　D

問3　C

問4　(4)　A　(5)　C　(6)　B

問5　ア　B　イ　A　ウ　B　エ　A

復習問題　第三講　模範解答

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①
（カ）④　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）提唱　（イ）殺伐　（ウ）克服　（エ）操縦　（オ）大局観
（カ）対象化　（キ）再現　（ク）近似　（ケ）直観　（コ）特異